

BUNYU NANJIO⁽¹⁾

by F. MAX MÜLLER

太宰 不二丸 譯

——マックスミュラー全集第六卷(一八三—一八九頁)所載——

オックスフォード大學が、マスター・オブ・ア
ーツの名譽學位(honoris causa)を最近授與した
日本の若い佛教僧南條文雄君は一八七九年の二
月以來オックスフォードに來てゐた。彼は京都
にある僧院(本願寺)の學生であり、漢文の造詣
深きを以て著はれ、これを自國語と同じ様に話
したり、文を綴つたりすることが出來た。又彼
の作つた漢詩の或るものは非常に好評を博した
ものである。それで彼は學友笠原研壽と俱に選
ばれて英語を學び、そしてその後で梵語の研究
に身を委ねんが爲に英國へ來ることゝなつた。
二人とも日本に住んでゐる三千二百萬の佛教徒
の中で一千萬以上を信徒に有する眞宗に屬する

僧侶であつた。それは佛教の中でも最も自由な
宗派である。その起原は支那の僧侶慧遠の昔に
遡り、紀元後三八一年に彼が支那に新しい僧院
を建て、阿彌陀佛(無量光)及び二脇士觀自在、
大勢至を尊崇したことに始まる。この新しい宗
派はその當時「白蓮社」と名づけられ、その後
非常に廣く傳播した。その宗派に屬する僧侶の
或る者は梵語の原典を集めるために印度へ派遣
せられた。そして佛教聖典、特に阿彌陀佛を信
ずる人々が再生せんと欲する *Sukhāvati* 即ち極
樂のことを書いた佛教聖典を含んだ此等の梵語
原典の幾らかは梵語から漢文に翻譯せられた。
それ等は今日に到るまで支那、西藏、日本に行

はれてゐる白蓮社の聖典となつてゐる。

その宗派の根本的教義は、西曆紀元の初めの頃に居たと云はれてゐる彼の有名なる龍樹にまで遡ることが出来る。眞宗は單に阿彌陀佛を信ずると云ふ事が救済への最も短いそして安全なる道程である。龍樹は云つてゐる。『佛法には無量の門あり。世間の道に難あり易あり。陸道を歩行せば即ち苦し、水道を船に乗らば則ち樂しきが如し。菩薩道亦是くの如し。或は勤行精進するあり、或は信方便易行を以て疾く不退轉地に到る者あり』と。

白蓮社のこの教義が第七世紀に日本へ傳來されてから、色々の宗派に分裂した。南條文雄君の屬してゐる眞宗は紀元後一一七四年から初まつてゐる。即ちそれは源空（法然）に依つて創められ、そしてその宗派に眞宗と云ふ名稱を付けた。かの有名なる後繼者親鸞（一二六二年死す）の時代になつて勢力あるものとなつたのである。

日本で用ひられてゐる佛教聖典の總て、或は始んど總ては梵語原典の支那譯である。併しなから此等の翻譯の多くは支那の翻譯者が原典に用ひられた特殊梵語を了解してゐなかつたためか、或は印度の翻譯者が正確に漢文に云ひ表はすことが出来なかつたためか、非常に不完全なものであると知られてゐる。それ故に同じ經典が再三再四翻譯された。日本で用ゐられてゐる重要聖典の一である *Sikṣavādyā* 即ち極樂莊嚴には十二種の支那譯がある程である。此等の翻譯された經典は各々相異つてゐて後に出たものが、その前に譯されたものよりも一層正確であると云はれてゐる。

古い以前、日本に幾らかの梵語學者が居て、何か教義上疑問が起つた場合には何時でも梵語原典を調べることが出来た。併し最近に於ては梵語研究は丁度支那に於けると同様、その國に於ても全く滅びて仕舞つた。南條文雄、笠原研壽の二人の若い僧侶がヨーロッパに送られたのは、彼等の國に梵語の研究を復興させんが爲め

であつた。二人はロンドンで英語を學びながら數年間を過した後、日本公使と前ウエストミンスター寺の教長の紹介をもつてオックスフォードなる私の許へ來た。そして梵語と佛敎聖典に用ひられてゐる特殊梵語、及びその色々の方言を勉強したいと云ふ二人の希望を申し述べた。私は出来る限り二人を援助することを約束し、先づ第一にヒトバデーシャとかシャクンタラーなどの書物に書かれてゐる普通の梵語を勉強する様にと二人に勸告した。この普通梵語の學習を二人は少壯梵語學者なるコープス・クリステイ・カレーヂの A. Macdonell 氏の指導の下にした。二人は文法に關する十分の智識を得てから、過去四年間、毎週二三回づゝ私の許へ來て一層難解な梵語の書物を讀んだり、未だ大部分が寫本の儘になつてゐる佛典や初期佛敎の時代に印度で用ひられてゐた色々の方言で書かれた佛典などを讀んだ。

此等の寫本は偉人 B. H. Hodgson 氏に依つて英國へ將來された。彼の名は東洋學に於ける

BUNYU NANJIO

最も偉大なる發見者、恩人の一人として、ヨーロッパの如何なる國に於ても知れ渡つてゐる。たゞに東洋學に於てのみならず、動物學、植物學に於ても又人種學に於ても同様である。けれども英國に於ては殆んど彼の名は知られてゐない。『Men of the Time』の最新刊に於てすら見出すことは出来ない。然し乍ら彼は幸福なる老後を當代のみの人でなくて不朽の東洋學者の一人であると云ふ確信をもつて慰藉してよい。(ネバールの言語に就いての彼の論文は一八二八年に出版せられた。)

不幸にして佛敎聖典の梵語寫本の數量は莫大なるものである。Burnouf は控へ目に佛敎史序論と稱してゐる大著述の中にホヂソン氏の寫本を十分に使用してゐる。そして私の二人の學生も決心してオックスフォード、ケムブリッヂ、ロンドン及びバリの圖書館に藏せられてゐる中で最も價值あるものと思はれる寫本の謄寫に着手した。此等の梵語原典は二三の例外はあるとして未だ寫本の儘で存在してゐるけれども、莫大な

る佛教聖典の支那譯は支那に於ても日本に於ても何度も出版せられた。しかし如何なる人でも一人で一生涯かゝつてもその總てを讀み了へることが出来るかどうか疑はしいことである。或る佛教の寺院では大藏經全卷が丁度最近アメリカから英國へ輸入されたそのやうに大回轉書架の上に整理して載せられ、そしてその寺院へ參詣した人々はたゞその回轉書架を押し廻すだけで全部を讀了したと云ふ功德を得ることが出来ると思はれてゐる。南條文雄君はオックスフォード滞在中に多くの立派な仕事をなした。その中でも *Tripitaka* 即ち三藏と稱する莫大なる聖典の全目錄を編纂した。それは大小一千六百六十二卷の相異つた聖典を含んでゐる。各々に梵語の名稱が還元され、その翻譯の年代、そして間接的にその原典成立年代の最小限度が決定されてゐる。これは私が『印度は我等に何を教ふるや』と云ふ講演で述べた様に、梵語文學史の殆んど全體に革命を齎したところの發見を導いたものである。吾々は現在ではベーダ文學

と後世復興期の文學との間に紀元後第一世紀頃から第五世紀までの間に亘つて佛教文學（聖典文學並びに一般文學）の一時代が存在してゐることを知つてゐる。梵語の發展を歴史的に研究せんと欲するものは誰でも將來ベーダから始めその後三藏を通り、最後にマヌやシャクンタラ及びその他復興期の作品に終らなければならぬ。

印度省長官の要求で南條文雄君が編纂し、オックスフォード大學印書局で印刷された目錄は不朽の仕事であり、一大著作物であり、そして梵語が研究されてゐる處であるならば如何なる國に於ても歡迎されてゐる。

長日月を費したこの仕事以外に南條文雄君及び學友笠原研壽君は數種の梵語の原本を校訂し出版する準備をした。それ等は日本の京都に於て何時かは現はれることと思つてゐる。不幸にして昨年日本に歸つた笠原研壽君は歸國後間もなく死亡した。京都の僧院（本願寺）へ急に呼び戻された南條文雄君は在來の支那式の木版印刷

が浩瀚な梵語の原本を出版するに都合がよい場合には梵語の印刷所を建設したいと云ふ希望をもつてゐる。Vajracchedikā 即ち能斷金剛般若經や Sukhāvatī-vyūha 即ち極樂莊嚴などのやうな短いとして一般によく知られてゐる聖典の或るものは南條文雄君と私とに依つてオックスフォード逸書の中に出版されてゐる。彼の歸國は日本の多くの僧院、大學、寺院等に梵語學の復興を促す事であらうし、校訂出版を出現せしめそして又一層批判的な、そして眞の佛教の歴史的研究を齎らすであらうことを信じて疑はぬ。

南條文雄君は英國で知り合ひになつた總ての人々から尊敬と友情とを勝ち得た。そして若し彼の生命が永く續くならば故郷に最も有利な影響を及ぼすことであらう。彼は眞面目な佛教徒でありそして又眞の基督教の眞面目な尊敬者でさへある。私は彼が居なくなつたので非常に淋しく思ふ。けれども私は自分の弟子友人を稱讃することを止めて、オックスフォードでのこの二人の日本の學生と知り合ひになつた或る宣教

師が、私がタイムズ誌に寄せた笠原の⁽³⁾追悼の文を讀んで、台灣から手紙を私の許に送つて來た中から引用することゝしやう。

彼は次の如く述べてゐる。——『笠原と私との交遊は半年足らずでありましたけれども、それ程の短い間の中に於てさへ、彼の純潔な性格と優しい性情は經驗と信仰が非常に相違した人々の間では殆んど考へることの出来ない情誼を私に惹き起させました。』

私は彼とそして彼の友南條文雄が不徳と云ふものに對しては影ほどの事でも非常に敏感であることを知つてゐます。二人はオックスフォードの或る學生階級の間に行はれてゐる此の種の或るものを知らないのではありません。そしてそれ等のことに對して抱いてゐた嫌惡は非常に鋭いものでありました。

私等は度々宗教上の問題に就て話しました、併し二人は明らかに爭論を好みませんでした、彼等は基督教の友達と爭ふよりも寧ろキリストを許して佛陀と同地位に置かんと欲したのであ

りませう。或る日オックスフォードの自分の部

屋で食事しながら私は二人に「佛教僧として進
まんどしてゐる君等二人と、キリスト教の宣教
師として進まんどして私との三人が相會してゐ
るのは不思議ぢやありませんか」と云ふた事を
覺えてゐます。それに對して、笠原が微笑して
「そう、併し二つの宗教は多くの共通點があり、
非常によく似てゐる」と云つた事をよく覺て
ゐます。二人は私が吾々の間のその相異點に就
てさほど平氣に眺めてはゐないのを明らかに悲
しんで居りました。私は二人と別れる日、二人
のさゝやかなる贈物をよく覺てゐます、即ち
二人は私に支那へ愉快な旅を續ける様、そして
いつも二人が「我が聖業」と云つてゐるものに
成功する様にどの希望を云ふて呉れました。』
私は南條文雄君が日本へ歸つてからの色々の
事を知らせてくれようし、そして故國や彼の僧
院(本願寺)のみならず、大學に於ても——そこ
では喜んで彼の名を名譽教授の中に列ねるであ
らう——名聲を博するであらうことに就ては少

しも疑はない。

私は吾が友南條文雄君に英國を去る前に今ま
での生活の重なる出來事を書いて呉れる様に求
めた。そして彼が私のために書いて呉れたもの
は又他の人々にも興味あることで、希有な善良
にして愛すべき心の所作に見入らしめることゝ
信するから、ほんの少しばかり變更し、省略し
た外は原文そのまゝを次に添へることゝする。

註 (1) See the *Times*, March, 1881.

(2) Collected Works of F. Max Müller. Vol. XIII.

"India, What, can it Teach Us?"

(3) Collected Works of F. Max Müller. Vol. VI.
p. 211—214. 笠原遺文集參照。

以上でマックスミューレル博士の本文は終つてゐて、次に博
士が最後に述べてゐられる様に、南條先生が大垣で誕生せら
れた時から英國を云られる時までの自傳が收められてゐる。
一讀して誰でも先生の眞摯なる學究生活に非常に感激せしめ
られることであらう。併し先に南條文雄自叙傳の出版あり、
又近くは先生最後の著作である懷舊錄の出版があるのである
から、今茲には略することゝし、最後に收められてゐる先生
の漢詩一篇をその英譯とともに次に轉載して此の一篇を終ら

A CHINESE POEM BY BUNYIU NANJIO.

*感懷九疊韻

- (1) 東人未試五天游
(2) 纔有梵書伴旅裘
(3) 道樹關心望萬里
(4) 固林絕跡送千秋
(5) 運微皇子沒邊地
(6) 時異高僧老故州
(7) 留學於吾已過分
(8) 願無蛇尾附龍頭

Translation.

- (1) 'I, a man of the East, do not yet try to
travel through the five (ancient) parts of
India,
(2) But have only a few Sanskrit books and
clothes for my journey;
(3) There is a tree of knowledge, which I think
of and long for even from the distance

BUNYIU NANJIO

of 10,000 li;

- (4) There is a forest of the "firm" trees, where
the footprint of a traveller (such as
Hiouentsang) might have vanished a
thousand years since.
(5) Fate was so bad, that the (Japanese) prince
died in a remote country region;
(6) Time was so different (from ours), that the
eminent priest grew old in his own country:
(7) Now my stay and study here are already
above my desert;
(8) So, I hope, that the tail of a snake will
not join with the head of a dragon.'

註 *航西詩稿 十四頁十五頁參照